日本語の起源「古典サンスクリット」の琉球語 ④
文字で解く古代史　邪馬台国と邪馬壱国は 倭(やまとの) 国

高橋　正典

はじめに

沖縄語や奄美語などの琉球語は、日本語の起源の古典サンスクリット語（以下 Skr. と言う。）である。第 2 回投稿文「日本語の起源『古典サンスクリット』で解く魏志倭人伝②」（202１年７月）で、日本語の古典 Skr. 起源説の経緯、渡来ルートなどを述べた。そのルートにある「ウチナーグチ」（沖縄方言）には、古典 Skr. の言葉を多く見つけることができる。同時に、日本語の影響を受けた漢字の訓読みや漢字の影響を受けるなどして入り混じった言葉も多くある。今も琉球諸島では、活きた言葉として古典 Skr. が使われている。

この琉球の古典 Skr.、日本語の起源をなす祖語は、古代に弥生人の言葉として琉球から日本に渡り、一方長江からの弥生人と、その後伝わった漢字が融合して日本語ができた。つまり古典 Skr. の呉音読みと解字を古典 Skr. で表現した訓読みの漢字による、文法の簡略な漢文体の日本語が完成した。話し言葉は、五十音の音調のない発音で複数の意味を持つ特徴がある。

古事記は、この漢文体の日本語で書かれた天皇系譜の歴史書で、二大言語の特徴であるインドの思想と漢文で現わされたそれぞれの長所を活かした創造的な融合語で多様で簡潔な文書である。Skr. の背景にあるのは、インドのリグ・ヴェーダ（神の賛歌）の神々の宗教思想であり、古事記に書かれた日本の神々と琉球の神々は、表現は異なるが同じリグ・ヴェーダの神である。

さて、琉球は、信仰深い地で、海に囲まれていることから月と水の女神に対する信仰が厚く、結果として女性神官・巫女の地位が高いことがある。古代リグ・ヴェーダでは太陽神・祖霊神のヤマ神の楽園・天国が、東の陽光にあるとされてきたが、後に天上から地界にも移ったとされる。時代は降って琉球でも、珊瑚礁が隆起して形成された幾多の鍾乳洞が、ヤマ神の楽園として信仰に繋がっている。つまり古事記の常世(とこよの)国として、信仰の点でも倭と琉球は繋がりがある。琉球の古代史は、不明であるが神々の名称からその姿を推測することは可能である。今回琉球語が古典 Skr. であることが明確になってきたことから、古事記の神々との関係も明らかになった。すなわち、伊邪那岐命、伊邪那美命（日・月神）に対応する琉球のシネリキヨとアマミキヨの関係が邪馬台国・邪馬壱国として繋がりがあることが分かってきた。

後漢書の邪馬台国、魏志倭人伝の邪馬壱国については、古事記に記された天皇や后、御子の名前・地名などを古典 Skr. とリグ・ヴェーダの神によって読み解くことができる。つまり二つの国は、中国福建省会稽東冶の東にある国と記されている奄美大島で、いずれも 倭(やまとの) 国と南の対の神の国のことである。この邪馬台国は、大倭王の第二代綏靖天皇によって創られた国号で後漢の侵略を抑止する意味があり、邪馬壱国は、卑弥呼の第七代孝霊天皇の御子夜麻登登母母曾毘賣命によって命名された国号で、魏と対等の同盟国などの意味がある。古代、大陸王朝の影響を受ける日本列島にあって、内乱を止め、相争う小国の集合と大陸からの侵略の抑止が不可欠だったのである。

目　次

はじめに……1

第１　**琉球の古典サンスクリット** ……３

１　琉球列島に活きる古典サンスクリット ……３

２　琉球列島を護る海と月、太陽の神 ……５

３　沖縄語の数詞 ……６

４　琉球列島と古事記の神々 ……７

５　古代人の生命観……９

第２　**サンスクリットと漢字の長所を活かした日本語**……１５

１　後漢を抑止する邪馬台国……１７

２　魏と同盟する邪馬壱国……２０

３　卑弥呼と大市（壱）媛……２１

４　古事記の常世国……２２

５　邪馬壱国への道……２３

別表　琉球語を古典 Skr. で解く　……２５

参考文献……３３

全国邪馬台国連絡協議会 HP　http://zenyamaren.net　（QR コード）無料公開

「私の邪馬台国論」投稿中　髙橋正典　masa1826@gold.ocn.ne.jp

「日本語の起源古典 Skr.で解く古事記、魏志倭人伝」

2021 年 1 月　①邪馬台国は囮の国、ヤマは倭の守護神

〃　7 月　②古事記が明かす：日本人のルーツ・守護神ヤマ神の形・教義・言語

2022 年 8 月　③古事記の邪馬台（壱）国と卑弥呼

2023/10/20

第１　琉球の古典サンスクリット

１ 琉球列島に活きる古典サンスクリット

以下の三つの片仮名の琉球語は、古典 Skr. 名詞複合語の言葉。赤太字は、その意味である。後の〔　〕内は文法のない名詞的な単語の連続体で／／で単語を区切っている。各単語は、／Skr. 単語［ラテン語（ローマ字）表記］・（発　音）・意味／の順に並んでいる。（　）の発音の赤字を拾うと琉球語の発音と一致する。

①チュラサン：興奮する美を称える〔cud（チュド）興奮させる／lavanya（ラワニャ）美しさ／śaṃs（サンス）称讃する〕（美しい）

②チムドンドン：胸がドキドキする〔cint（チント）思う・考える／mūla（ムーラ）本源／dhāv（ドヴ）走る・動く／nu（ヌ）叫ぶ／同左〕心（胸）が動悸する、古く心は心臓にあるとされる。

③ウシヌガマ：破壊から遠ざかる洞窟の家〔uṣ（ウシ）破壊する／nud（ヌド）遠ざける／gaha（ガハ）窟／māna（マーナ）家〕：台風や争いから避難する洞窟の家の意味

次に、日本語の呉音読みの漢字の古典 Skr. 表記の例

古事記（こじき）：天皇の日々と物語〔koṭi（コチ）最高度・天皇／dina（ヂナ）日々／kīrtana（キールタナ）物語〕帝紀・旧辞の意味

最初の三つは、今も活きた琉球の言葉である。その片仮名の発音を、一語（又は二～三語もある）ずつ分けて、その発音が語頭になる単語を Skr. 辞書からを探しその意味を繋ぎ合わせると、言葉の真の意味が見えてくる。勿論、Skr. そのままの沖縄の単語〔mithuna（ミツナ）夫婦〕や二つの Skr. 単語からなる　**カーラ**：川〔ka（カ）水／raṃh（ラン）流れる〕なども多く存在する。

なお、琉球語に音訓漢字がないのは、日本語が古典 Skr. と漢字が融合しているためである。

（留意すべき Skr. と異なる発音）

琉球語は、発音も日本語の 50 音とほぼ同じであるが、琉球語の特徴もある。今後、両者を比較することによって、琉球語と日本語の発展過程が分かるものと期待される。なお、てにをはなどの名詞格助詞、動詞活用語尾などは今後の課題として調べていく必要がある。

さて、日本に伝わった古典 Skr. 名詞複合語は、文法書にもあるように名詞・形容詞・副詞の語幹、動詞語根、分詞などを名詞として使う連続体で、文型は S・O・V でこれを左から右に読み解くが、修飾語が後ろにある場合もある。文法は消滅し、発音は音調がなく平明で日本語の特徴である Skr. アルファベット由来の 50 音の音素がある。また話し言葉として伝わったため文字はなく、伝搬途中のインドシナ半島の影響も受け、多くの単語は、Skr. 単語の語頭 1 音節中心の３・４音節までの連続体である。

なお、琉球語には漢字の呉音訓音がないことや神の表現が異なるため、同じ神でも古事記の神と異なって見えるが、基本的に琉球語は、漢字と融合前の日本語と同じと考えられる。

細かくは、アルファベット ā・ī・ū・e・o、ai（e）・au（ā）などの長母音に少し違いもある。また、単母音 ṛ（リ）・ḷ（リ）を i と発音することは同じであるが、nu・m を n（ン）と発音することや、ウイ・ジユ・チヤがウィ・ジュ・チャなどと発音されていること等に違いがある。

以上が日本語と琉球語の違いである。なお、Skr. の表記は本来デーヴァナーガリによるが、ここでは、ラテン語（ローマ字）表記によっており、梵和辞書を使っている。

（発音）

表１　Skr. の日本語読み変え

日本語の音	サンスクリット語の発音 （ラテン語〔ローマ字〕表記）
ア	a、aha、ava
エ	e、ai
オ	ā、 o、au
キ［ギ］	ki、khi、gi、ghi、kṛ
チ（シ）	ci、chi、ti
ジ	ji、di
タ［ダ］	ta、tha、da、dha、dhā
パ（ハ）	pa、bha、ha
ヒ	hi、vi、 vṛ 、pi
ミ	mi、mṛ、vī、
ワ（ヴァ）	va

注１　実際の解釈で、有効と考えられる発音
２　表２のとおり日本語音素は 50 音
３　この外、連字、半母音の発音がある。

表２　50 音と Skr. アルファベット対比

母音 ＼ 子音	日本語 50 音にないサンスクリット語アルファベット	a ā	i ī ṛ ḷ	u ū	e ai	o au
k	kh	あ	い	う	え	お
	g gh	か	き	く	け	こ
s	ś ṣ	が	ぎ	ぐ	げ	ご
	j jh	さ	し	す	せ	そ
t	ṭ ṭh t th c ch	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
	ḍ d ḍh ḍh	た	ち	つ	て	と
n	ṅ ṅ	だ	ぢ	づ	で	ど
h		な	に	ぬ	ね	の
	b bh	は	ひ	ふ	へ	ほ
	p ph	ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ
m		ま	み	む	め	も
y		や	い	ゆ	え	よ
r	l	ら	り	る	れ	ろ
w	v	わ	ゐ	う	ゑ	を
ṇ		ん				

注　アルファベット順　a ā i ī u ū e ai o au k ṅ c ch ṅ ṭ ṭh ḍ ḍh ṇ t th d ḍh n p ph b bh m y r l v ś ṣ s h

（連字の省略発音等）

２単語が連続する時、前単語の語尾の母音と後単語の語頭母音（の時）、が合体する、英語と同じである。

連続する子音が二つ以上と母音から構成される音素は日本語には存在しない。これらの内 y･r･l･v の半母音が中間にある場合、連字の頭音と母音での発音とし、中間は省略している。それ以外も省略の例がある。なお、kh、gh、ch、jh、th、dh、ph、bh 等は連字でない。

（例）・稲光（いなびかり）（雷光）＝点火して光を発し消える〔indha（インドハ［イナ］）点火する／vikāśin（ヴィカーシン）輝く・光を発する／lī（リ）隠れる・の中に消える〕子音の連字 ndha の dh が省略され最初の na が残り発音さている。

サンスクリット語の正式の発音、連字については、別途文法書を見られたい。

２　琉球列島を護る海と月、太陽の神

（参考）日本語の Skr. 起源説の経緯

明治の京都の英学者で仏教者の平井金三氏は、雑誌「新公論」に『日本の言葉はアリアン言葉なり』を発表、日本語とヨーロッパ・インド等の言語を比較しウラル・アルタイ語族説を否定のうえ、日本語のＳ・０・Ｖの語型、発音は Skr. に似るとされた。

京都大学名誉教授の梶　慶輔先生は、平井氏の説を継ぎヴェーダと Skr. の日本伝播について研究し、各種文献を引用してその渡来について記されている。日本語の 50 音は Skr. アルファベット由来であることやインドシナ半島の Skr. 単語の語頭音の連続体の言葉などとの類似点を発表されている。

ピエール＝シルヴァン・フィリオザ著　竹内信夫訳「サンスクリット」は、古代インドで、古典 Skr. 名詞複合語は、文法的機能の削減により残された名詞語幹、動詞語根・語幹の連続体として、非常に簡便な言葉となったと時代を渡って説明されている。ちなみに、インドシナ半島では、古典 Skr. が伝搬し地域の言語と融合し 1～3 音節の短い単語となって使われている。

現在のインドシナ半島のミャンマー、タイ、ベトナム、カンボジア等の単語は、1～3 音節で主に 1 音節（一母音と子音で構成）、国によって日本語に似た助数詞（匹、人、個）、「てにをは」にあたる格助詞がある。文法は中国語にも似て簡略な反面、発音は概して難解。注目すべきは、インドシナ半島ルート上の琉球語は古典 Skr. が多く、日本語成立の元をなしている。

日本列島では、長江沿岸から渡来した弥生人の呉音の言葉と漢字が、琉球からの古典 Skr. と永い時間を経て融合する。この言語を簡単にいえば、漢文に似て文法は簡略で、一文字一音節一意の漢字に順じ主に Skr. の語頭一音節の単語、発音は中国語の四声と異なり 50 音の少ない音素で平明である。古事記は、古典 Skr. の呉音読みの漢字と解字を古典 Skr. で訓読みする漢字の混合した漢文体で、古典 Skr. と漢文の長所を活かした使い易い日本語が完成したのである。

なお、琉球列島では、普段の日常生活の中にも多くの古典 Skr. がある。表―３のとおり。

表―３　琉球語：日常の古典 Skr. の例

琉　球　語	言葉の意味〔①Skr.（読み）意味／②／③〕
首里　シュリ	英雄の王〔śūra（シューラ）英雄／īśva（イーシュワ）王〕
琉球国　リユキユ	①海が保護し光線が賦与する国〔ṛṣ（リス）流れ／yu（ユ）保護する／kiraṇa(キラナ)光線／yuj（ユジ）賦与する〕 ②正義を堅持し王冠を着ける〔ṛta 正義／yu 固持／kirita 王冠／yuj 着ける〕
ヤンバル	成長する森を保つ〔yam（ヤム）保つ・従う／vana（ヴァナ）森・木／ruh（ルフ）成長〕

カリユシ 注　沖縄のアロハで軽石のめでたい意味	①水と結びついて動く石〔ka（カ）水／ṛ（リ）動く／yu（ユ）結びつく／śila（シラ）石〕軽石 ②願いが叶い手に入れる〔kāṅkṣ（カンクス）願う・期待する／ṛ（リ）押す・進む／yu（ユ）手に入れる／sidh（シド）実を結ぶ〕
城　グスク	広大な美しい家〔guru（グル）広大なる／su-kula（スクラ）美しい家〕
ウシヌガマ	破壊から離れる洞窟の家〔uṣ（ウシ）破壊する／nud（ヌド）遠ざける／gaha（ガハ）窟／māna（マーナ）家〕
太陽　ティーダ 太陽の子 テダコ	燃える火の神〔tejas（テージャス）火・光／īśvara（イーシュワラ）最高神／dahana（ダハナ）燃える〕 火が燃える太陽の子〔tejas（テージャス）／dahana（ダハナ）／kāṣṭhā（コスター）太陽／kan（カン）子供〕コ＋カ＝コ
魂　マブイ	心臓にある心〔mānasaka（マーナサカ）心／bukkā（ブッカ）心臓／īś（イース）に所属する〕心は心臓にあるとする
沖　ウチ	大きい海〔ūrmi（ウーミ）海／tivra（チワ）大きい・恐ろしい〕
サーターアンダギー	卵形の砂糖の捏物揚げ食品〔砂糖（サーター）［漢字］／aṇḍa（アンダ）卵／ghṛta-pūra（ギタプーラ）捏粉油脂食品〕

3　沖縄語の数詞

琉球語の数詞は独自のもので、人間についてインドの〔daśā（ダショ）10 年の人生の期〕の人生を四つ（学生期、家住期、林住期、遊行期）に分ける思想に準じた姿が描かれている。死滅後は、魂は水となりヤマのもとに行き、虚偽を成した魂は地獄へ追い払われる。解脱した魂は、自由となる。

日本語の数詞は、古事記の大八島など 14 の島の名前に入れられている。漢数詞（一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬）の訓読みの和数詞と、つの助数詞は、漢字の解字（文字の成立ち）を古典 Skr. で表現したもので、漢字と古典 Skr. の融合による日本語の起源を現わしている。同時に、琉球語と同じように人生の四つの期とヤマの神判が描かれるとともに、琉球語と異なり生死をめぐる輪廻と解脱してヤマの天地・楽園に行くまでが加わっている。外に、大八島が人間の形をしたヤマ神の姿であることや、男女神の凹凸の形が隠されている。

いずれにしろ、琉球語の数詞は、日本語の数詞と類似の部分があり、日本語の起源と繋がっていることが分かる。（参照：第２回投稿文の大八島国の言葉の起源：大和言葉の数詞）

表―４　沖縄語の数詞、人生の期を描いている

沖　縄　語	言葉の意味〔①Skr.（読み）意味／②／③〕
1　ティーチ	神が誕生させる〔taitila（テチラ）神／īr（イール）産出する／tiraya（チラヤ）成就する〕
2　ターチ	年少になる〔taruṇiman（タルニマン）青年・年少／tiraya（チラヤ）成就する〕
3　ミーチ	結婚する〔mithuna（ミツナ）夫婦／tiraya（チラヤ）成就す〕
4　ユーチ	親戚をつくる〔yujya（ユジャ）親戚関係／tiraya（チラヤ）成就する〕
5　イチチ	強い支配者となる〔īś（イーシュ）支配する／tīvra（チーワ）強い／tiraya（チラヤ）成就する／〕
6　ムーチ	引退する〔mukta（ムクタ）解放される／tiraya（チラヤ）成就する〕
7　ナナチ	死滅して水になる〔nāśa（ナーシャ）死／nadya（ナダ）水／tiraya（チラヤ）成就する〕魂が水に
8　ヤーチ	神に近づく〔yāman（ヤーマンハ）神に近づく／tiraya（チラヤ）成就する〕
9　ククヌチ	不徳は地獄へ追い払われる〔kuṭila（クチラ）不徳／kukūla（ククラ）地獄／nud（ヌド）追い払う／tiraya（チラヤ）成就する〕
10　トゥー	解脱し自由になる〔tāraka（トラカ）令解脱／unmuc（ウンムッチ）自由にする〕

４　琉球列島と古事記の神々

弥生時代のころ、南西諸島では九州と交易があったとされるが、集落が形成されるのは 11 世紀。文化圏も薩南諸島の北部、奄美・琉球諸島の中部、その南の南部で異なり、言語では、さらに４つの諸語の分布があるとされる。従って、当時の琉球の神々について、古事記の神々との関係は明確でない。しかし、後漢書倭伝に記された邪馬台国、同じく魏志倭人伝の邪馬壱国は、いずれも福建省会稽東冶の東と明記されており、琉球列島のしかるべき島が関係していることに間違いない。逆にこの記述から当時信仰されていた神々が明らかになるものとも考えられる。

首里王府編纂『おもろさうし』1531～1623 年は、１２世紀から１７世紀初頭にかけての神謡が収められたもの。この中に、アマミキヨとシネリキヨが琉球の創世神とされていることや、ヲナリ神を詠ったオモロが数多く見られるとされる。時代的には、全く邪馬台国や邪馬壱国に合わないが、先ずはこれらの神々を古典 Skr. によって見る。

（琉球の神々）

古事記・日本書紀は、帝紀、旧辞を基本にした古代天皇の伝承書である。この中に、様々の神々の記述がある。一方、琉球では、王国時代にアマミキヨ、シネリキヨによる開闢神話があるとされる。しかし、古事記のように神から王・天皇への系統立った世襲の記録はなく、地域の祖霊神とインドのリグ・ヴェーダに由来する自然神が地域に応じて信仰されている。神話として伝承される神は、月と水の女神のアマミキヨと太陽の神であるシネリキヨである。琉球列島が美しく豊かな大海に囲まれた島嶼で太陽光から自然の恵みを得ていることからいかにも自然なことである。

一方、水の女神で知られている来訪神キンマモンは、リグ・ヴェーダの神で、大河サラスヴァティーの女神でもあり、後世文芸守護の神とも成った弁財天とされる。地域共同体の祈願行事を行う祝女のノロ、ユタは化身、すなわちサラスヴァティーの権化である。

新城島のパナリ島の意味は、実りに感謝する娯楽の島の意味で、アカマタ、クロマタの神は、それぞれ、次のとおり。

アカマタ：茶色の神〔Skr.のアーカピラ（茶色）／マータリ（ヤマ神・祖霊神と同居する神）のヴィシュヌ神（ハリ神：茶褐色）〕ヒンズー教の三大神の一柱、輻射光と祭祀の神

クロマタ：黒色の神は〔クリシュナ・ロガ（黒色）／マータリ（同上）のシヴァ神(マハカーラ：大黒)〕ヒンズー教の三大神の一柱、暴風雨（台風）の神で、豊作に関係する神

なお、インドの神々は、神の賛歌集「リグ・ヴェーダ」や「アタルヴァ・ヴェーダ」を参考にされたい。

（アマミキヨとシネリキヨ）インドのリグ・ヴェーダの本源神ヤミーとヤマの化身

アマミキヨは、インドのガンジス河に注ぐヤムナー河の女神である。古事記の、伊邪那岐命と伊邪那美命では、男神の伊邪那岐命が物語の中心であるが、琉球では女神のアマミキヨが上位である。これは、月と水が生活や安全に重要な役割を果たしていることから上位の神と認識されているのであろう。

倭（やまと）は、ヤマ神の聖地である。同様に、阿児奈波島、沖縄本島、奄美大島は、アマミキヨとシネリキヨの神に庇護された島や土地であろう。化身の神は、本源から土地に合わせ創神されている。

古事記の伊邪那岐命と伊邪那美命の由来は、第2回投稿文に記している。すなわち、ゾロアスター教の神イマとイメーが、インドに伝わりリグ・ヴェーダのヤマとヤミーとなり、古代日本に伝わって化身の伊邪那岐命と伊邪那美命になった。世界最古の宗教経典とされるゾロアスターの聖典「アヴェスター」の中で、イマは太陽神ヴィヴァスヴァットの子で、人間の王として善政を敷き、死して死界の王となる。リグ・ヴェーダの「ヤマ（死者の王）の歌」の中では、最高天にあって祖霊と共にあるとされる。インドでは、古くは、生前に善い行いをした人は、最高天にあるヤマの理想郷の国に行くとされる。兄のマヌは、人間の始祖とされ、妹のヤミーは、後にヤムナー川の女神となった。ヤマ・ヤミーはいずれも祖霊神で、ヤマは太陽神、ヤミーは月と水神。天水は月にあり不離の関係である。

人間の悩みを払拭する呪法を本領とするアタルヴァ・ヴェーダ賛歌にカーラ神（「時」）の歌がある。ヤマ神の異名とされる死の神カーラは、「時の歌」の中で、天地創造神として最高原理の地位に高められ、「カーラの中に太陽は輝く」と太陽との同化が明瞭になっている。また、カーラと同一視されるブラフマンは、太初に東方に生じ、この宇宙で神々を造り、今は東方に離れて眠るとされる。勿論、ブラフマンは、ヒンズー教の三大神の一柱である。つまり、死者の王ヤマ神は、カーラとして最高神となり、ブラフマンとして東方の最高天で太陽と共にある人間の神である。

一方、古事記では、神名の Skr.解釈から、伊邪那岐命は人間生活の神であり、伊邪那美命は死者の神である。また、それぞれ太陽光線の支配者の命、月と水の支配者の命でもある。

５　古代人の生命観（参考：「古代インドの神秘思想」服部正明、講談社学術図書）

琉球と古事記には、霊魂不滅と解脱の共通の宗教思想があるが、違いは古事記にある輪廻転生は琉球にはない。琉球では、死者の魂は年月を経て祖霊神として地域の御嶽の守護神となるとされる。

一方、リグ・ヴェーダでは解脱した死者の魂は、最高天のヤマの楽園で祖霊神と共に暮らすとされるが、後に楽園は、地下に移ったとされる。古事記では、伊邪那岐命と伊邪那美命の二神による国土創生物語、すなわち大八島など十六の島々の誕生神話の中に輪廻転生とヤマの神判、そして解脱のヤマの教義が描かれている。第２回投稿文を見られたい。

古来インドでは神秘思想として「五火説」がある。人が死ぬとその生命である水は、火葬の煙となって天界に上昇し、①月に至り、水をたたえる容器である月が満たされると、②雨になって地上に降る、③地上に降った雨は草木に養分として吸収され実って、③食物となる、食物は食べられて④精子となり、母胎に入って⑤胎児となる、児は生まれてこの世に生存し、寿命が尽きると、火葬の煙となって天界の月に赴く。この輪廻の思想にあわせ、二道説がある。苦行を修めた人は、月から太陽に赴きさらにブラフマンに到達しこの世から解脱・解放されるとする。

結局、古事記の伊邪那岐命・伊邪那美命は、古代インドの神秘思想に準じていると考えられるが、琉球では、祖霊神はニライカナイ（海の常世国）から戻って御嶽に祀られ守護神となる。アマミキヨ・シネリキヨも来訪の神として御嶽に祀られ守護神となっている。

（琉球列島の常世國）

アマミキヨ、シネリキヨは、神名の Skr.解釈から、表―６のとおりであるが、伊邪那美命、伊邪那岐命と比べると人間の生活に関連している印象を受ける。

（アマミキヨ）

①海と月光の神の伴侶（妻）、**②無限の魚を創造する伴侶、③種子を発芽せしむ水の伴侶**

（シネリキヨ）

①天則に従わしむ日光の指導者の伴侶（夫）、**②死者の負う罪を浄める神判、**

琉球の常世（とこよの）国は二つあり、それぞれ神の国ニライカナイ、オボツカクラは、ヤマの楽園と同じ

ように地界と最高天にあるとされる。古典 Skr. の意味は次のとおり。
①ニライカナイ：海の神の殿堂のこの世の楽園の穴（海神が渡来してくる神の国）
②ヲボツカクラ：最高天の幸福な太陽神の家（天神が渡来する神の国）

表―５　古事記の伊邪那岐命、伊邪那美命（古典Skr. の解釈）

	言葉の意味〔①古典Skr.（読み）意味／②／〕
伊邪那岐命（いざなぎの）	①**天空の太陽の光の支配者の命**〔īś（イーシュ）支配者／savitṛ（サヴィトリ）太陽／nabha（ナバ）空／ghṛṇi（ギニ）熱・光線／〕邪の呉音しゃ ②**夫の人間の暮らしを支配する命**〔īś（イーシュ）支配者／sahacarī（サハチャリー）配偶者／nara（ナラ）人／gṛha（ギハ）家庭／〕
伊邪那美命（いざなみの）	①**水と夜の月の支配者の命**〔īś（イーシュ）支配者／salila（サシン）水／nakta(ナクタ)夜／mṛga-maśa（ミガマサ）月／〕 ②**妻の人間の死を支配する命**〔īś（イーシュ）支配者／sahacarī（サハチャリー）妻／nara（ナラ）人／mṛ（ミ）死／〕
（参考） 蝿伊呂泥（はえいろね）	第七代孝霊天皇の第三后の意富夜麻登玖邇阿禮比賣、四后と姉妹 **神々に祈願する姉**〔hvā（ハー）祈願する／vaihāyasa（ヘハーヤサ）空中を動く・神々／īr（イール）生まれる／ā-netṛ（アーネ）指導するもの：姉〕
蝿伊呂杼（はえいろど）	第七代孝霊天皇の第四后で三后の妹、姉は蝿伊呂泥であろう。 **神々に祈願する妹**〔hvā（ハー）祈願する／vaihāyasa（ヘハーヤサ）空中を動く・神々／īr（イール）生まれる／ādhā（オト）受け入れるもの：妹〕　琉球の「おなり神」に類似

（ウチナーンチュとヤマトンチュ）　　表―７参照

ウチナーンチュとヤマトンチュの違いを見る。ウチナーンチュは、大海に囲まれ離れて永住する種族のことである。すなわち、アマミキヨやキンマモンなどの海月・太陽神を信仰して住む種族のことである。沖縄、阿児奈波は、いずれも、海神や太陽神が庇護する土地の意味もある。

ヤマトンチユは、ヤマの新しい聖地へ渡る種族で、日本に定着したもの。古事記の大八島などの国土創生は、伊邪那岐命と伊邪那美命の国生みによっており、本源神ヤマの土地とされる。

ヤマトンチユとウチナーンチュは、いずれも古代に分かれた日月神を信仰する種族である。

（参考：山とヤマ神の関係）

大山津見神〔ābhāsa（オホーサ）／類似（分神）／yama（ヤマ）ヤマ神／tuṅga（ツンガ）山／mi（ミ）固定する・立てる／〕山を創ったヤマ神の分神

表―６　　琉球の神と島（古典 Skr. 解釈）

琉　球　語	言葉の意味〔①サンスクリット語（読み）意味／②／③〕
アマミキヨ 阿麻弥姑： アマミコ	①海と月光の神の伴侶〔amara（アマラ）神・天／vīci（ミチ）海／kiraṇa（キラナ）月光／yauthika（ヤーウチカ）伴侶〕 ②無限の魚を創造する伴侶〔a-māt（アマート）無限の／mīna（ミーナ）魚／kḷp（キプ）生み出す／〕 ③種子を発芽せしむ水の伴侶〔ammaya（アンマや）水の／vīja（ミジャ）種子／kisalaya(キサラヤ)発芽せしむ／〕 ④海の神の子孫〔a-mara（アマラ）不死の・神／vīci（ミチ）海／kaulya（カーウラ）貴族の子孫〕
シネリキヨ 志仁礼久： シニレク	①天則に従わしむ日光の指導者の伴侶〔śikhā（シカ）光線・炎／netṛ（ネーティ）指導者／ṛta（リタ）天則・正義／kḷp(キプ)従わしむ／yauthika（ヤウチカ）伴侶〕 ②死者の負う罪を浄める神判〔sic(シチ)浄める／naidhana（ナイダナ）死・最後の／ṛṇa（リナ）有罪／khyā（キョ）宣言〕 ③日光によって暗黒を切り裂く貴い種族〔śikhā（シカ）光線・炎・山頂・指導者／nīla（ニーラ）暗黒／lekhana（レーカナ）切り裂く／kulina(クリナ)貴き種族〕
ウチナーンチュ	大海に囲まれ離れて永住する種族〔ūrmi(ウーミ)海／tivra（チワ）大きい／naddha（ナッダ）囲繞された／nunna（ヌンナ）離される／cira（チラ）長く存在する／yūthya（ユタ）人の群れ〕
沖　ウチナー	①大海に囲まれた〔ūrmi（ウーミ）海／tivra（チワ）大きい／naddha（ナッダ）囲繞された〕 ②海と太陽が庇護する〔ūrmi（ウーミ）海／tigmâṃśa（チグマンサ）太陽／nātha（ナータ）庇護〕
ヤマトンチュ	ヤマの離れた聖地へ渡る種族〔yama（ヤマ）ヤマ神／dhāman（トマン）領地（聖地）／nunna（ヌンナ）離される／tṝ（チー）渡る／yūthya（ユータ）人の群れ〕
阿児奈波島 アコナハ島	多量の水に囲まれた砦の島〔ap（アプ）水／kāya（コヤ）多量／naddha（ナッダ）囲繞された／harmya（ハルムヤ）砦／〕
沖縄　オキナワ 注　沖(おき)は後世の命名	①蔽われた海に繋がる土地〔ogha(オガ)海／kīrṇa（キールナ）蔽われたる／nah（ナフ）結び付ける／vasumati（ワスマチ）地域・土地〕 ②海と日光が庇護する土地〔ogha(オガ)海／kiraṇa（キラナ）日光／nātha（ナタ）庇護／vasumati（ワスマチ）地域・土地〕

琉球国（流求） リウキウ ルーチュークク	（前出） ルーチュークク太陽と月が保護する国〔ruci-pati（ルチパチ）太陽／〔tithipraṇī(チチパニー)月／yu（ユ）保護する／国〕
奄美大島	①月と太陽の神の島〔a-mara（アマラ）天・神／mṛga-maśa（ミガマーサ）月／āditya（オヂタ）太陽神／〕 ②月・海神の南の島〔amara（アマラ）天・神／mṛga-maśa（ミガマサ）月／vīci（ミーチ）海／avāc（アボチ）南の／〕 ミ＋ミ＝ミー

（琉球の神と祭祀）

琉球の神や祭祀に関する言葉の意味は、表―７のとおり。このうちリグ・ヴェーダの水の女神サラスヴァティの権化とされる「おなり神」は姉妹の意味で、祭政一致の中で祭祀を担う女性の最高位にある為政者に近い存在とされる。同じような姉妹が古事記にも存在する。第七代孝霊天皇の第四后は蠅伊呂杼（はえいろど）の呼称の妹で、第三后の姉は富夜麻登玖邇阿禮比賣命（おほやまとくこあれ）の名前であり蠅伊呂泥（はえいろね）と考えられる。祭政一致の時代であり、恐らく神意を占う高貴な女性神官であったと考えられる。

表―７　琉球の神と祭祀（古典 Skr. 解釈）

琉球の神々	神　々　等　の　解　釈
神の座：イビ	神の敷物〔īśvara（イーシュワラ）最高神／bṛsī（ビシー）敷物〕
来訪神：キンマモン	①吉兆を振りまき移す婦人〔kṝ（キー）ばらまく／nud（ヌド）移す／maṅgala（マナラ）吉兆／mānuṣī（モヌシー）婦人〕 ②正しく聡明に話す婦人〔kirtaya（キルタヤ）話す／nūd（ヌード）正しい／matimat（マチマト）聡明な／mānuṣī（モヌシー）婦人〕 天上の水の女神、言葉の女神：サラスバティ：弁天
祝女：ノロ ユタ 共に神の化身	サラスヴァティ女神の化身〔nārāyaṇa（ノロヤナ）神の権化〕 分身〔yuta（ユタ）分離された〕 キンマモンから宣託を受ける

をなり： ウナイ神	姉妹〔ā-bhāsa（オボサ）類似／nāri（ナーリ）女〕 姉妹の神〔upamā(ウパマー)類似・相似／nāri（ナーリ）女／īśva（イーサ）神〕 サラスヴァティの化神
常世国　海神 ：ニライカナイ	海の神の殿堂のこの世の楽園の穴〔niketana（ニケタナ）殿堂／lavaṇoda（ラワノダ）海／īśva（イーサ）神／kha（カ）穴／nandana（ナンダナ）楽園／iha（イハ）この世〕アマミキヨ
常世国　天神 ：ヲボツカクラ	最高天の幸福な太陽神の家〔ābhoga(オボガ)丸天井／dhurya（ツラ）最上／klyāṇa（カラナ）幸福／kula(クラ)家／ravi（ラヒ）太陽神〕
シルミチュー： 霊場の洞窟	輝く太陽が月と結婚した穴〔śikhā(シカー)炎・光線・山頂・指導者／ruc（ルチ）輝く／mṛga-māsa（ミガマーサ）野兎の月／chidra（チドラ）穴／yuj（ユジ）結婚する〕
シニグ祭り シヌグ祭り 沖永良部島のシニグ洞	太陽を導き歓迎する祭り〔śikhā(シカー)炎・光線／nī(ニー)導く／gūrta(グーラ)歓迎せられる ／祭り〕 太陽を快く送る祭り〔śikhā(シカー)炎・光線／nud（ヌド)押しやる／gūrta(グーラ)快く／祭り 〕 かって大山頂上で各支部の式典を済ませ次に集落のシニグ洞でシニグ祭りが盛大におこなわれた。ヤマと鍾乳洞の祭祀の形が残る
霊力：セジ	生命の本源の意欲〔svecchā（セッチャー）意志／jiva（ジワ）生命の本源〕魂：意欲 セジと火はニライの神のアマミキヨによってもたらされた
奄美人：アマミク	〔月神の種族〔a-mara（アマラ）天・神／mṛga-maśa（ミガマーサ）月／kula（クラ）種族・高貴の家系〕 アマミキヨ族の呼称が変化　渡海先祖神　稲を伝える
御嶽：ウタキ	身近に奉持する祭式〔uc（ウチ）身近な／dhara（タラ）奉持する／kriyā（キヤー）祭式〕
パンヅー	①は滅された苦しみ〔panna（パンナ）滅ぼされた／du（ヅ）苦しめられる〕 ②沼の悪人〔paṅka（パンカ）泥・沼／durjana（ヅルジャナ）悪人〕

新城島 パナリ島	**実りに感謝する娯楽の島**〔phal（**パ**ル）結実／nam（**ナ**ム）お辞儀をする／lilā（**リ**ラー）娯楽・変装／〕
アカマタ	**茶色の神**〔ā-kapila（**アーカ**ピラ）茶色／mātali（**マータ**リ）ヤマ神・祖霊神と同居する神〕 hari 神（茶褐色）：ヴィシュヌ神で輻射光と祭祀の神、ヒンズー教の二大神
クロマタ	**黒色の神**〔kṛṣṇa（**ク**リシュナ）黒い／rāga（**ロ**ガ）色／mātali（**マータ**リ）同上〕 mahā-kāla（マハカーラ）大黒：シヴァ神
波照間島（はてるま）	**海と太陽の土地の島**〔hrada（**ハ**ダ）湖・海／tejas（**テー**ジャス）火・光・力／ruc（**ル**チ）輝く／mahī（**マ**ヒー）土地／〕
シカー：神女	**指導者**〔śikhā（**シカー**）光線・炎・山頂・指導者〕

第２　サンスクリットと漢字の長所を活かした日本語

（古事記と後漢書・魏志倭人伝を繋ぐ言葉）

簡略な文法、50 音の音素と平明な発音・古典 Skr. の漢字音訓表現、字義・解字・構成部首などを駆使した語彙、そしてインドの神の思想を基礎に古事記に古代史は明記されている。

要点１　古代史を解く　倭＝邪馬台国・邪馬壱国　：赤漢字は Skr. 系

倭（わ）＝vaṃśa（ワンサ）種族・誇り／was（ワス）住む・輝く／vasudhā（ワスダ）国土

①倭（やまと）＝（人＋禾（のぎ））＋女＋領地＝人間の始祖（ヤマ）＋女（ヤミー）＋聖地　：禾＝苗（なえ）

＝ヤマ＋ヤミー＋〔dhāmann（トマン）神の領地〕

＝ヤマ神の聖地　：漢字部首の Skr. 読み

②邪馬（やま）・夜麻（やま）＝ヤマ神・一対をなす・双生児・手綱・御者・抑止・自制・道徳・最高義務

：Skr. 呉音読みの意味

③邪馬（やま）台国（だいこく）＝ヤマ神の台地の国〔ヤマ神＋台：台座・高い台地＋国〕＝ヤマ神の聖地の国

ヤマ神の台座・台地はヤマ神の領地のこと＝倭　：漢字字義

④邪馬（やま）壱（いち）国（こく）＝❶対等の同盟国〔ヤマ：一対＋壱：一つ・等しい・集まる／〕魏と倭の同盟国

❷ヤマ神の聖地の国〔yama（ヤマ）ヤマ／īśva（イシァ）神／tirthaka（チタカ）聖地／〕＝倭　：呉音 Skr. 読み

⑤漢（かん）＝河（かわ）（漢・河とも天の川の意味がある）〔kha（カ）天＋vāri（ワーリ）川〕天の川

若（わか）：河の発音を反転して後漢の隠語　：同上

注）カワは他に国を創るの意味も〔kartum（カツム）作る／vasu-dhā（ワスダー）国土〕

⑥魏（ぎ）＝大吉備（おおきび）＝女＋鬼＋禾＝〔ā-vāha（オボフ）嫁＋kṛtānta（キターナ）死神＋bīja（ビージャ）穀類の種子〕　：漢字部首の Skr. 読み

⑦南（なむ）＝❶南（みなみ）の方向、❷君主（世襲の王）、❸朝日の方向〔navodaya（ナヲダヤ）今まさに昇った太陽／mukha（ムキャ）方向〕

⑧奄美大島：破壊に不滅の南の島〔amara（アマラ）天・神・不滅／mṛd（ミド）破壊／avāc（アボーチ）南の／〕

注　（財）鈴木学術財団「大梵和辞典」2015（株）黒岩大光堂では、「yama は、死んで天界にある祖先を支配する神、下界を支配する死の神」と記されている。その他、②邪馬・夜麻は上記のとおり広い意味がある。また、神には不死不滅の意味があり、ヤマ神は、霊魂不滅・輪廻と解脱の信仰があったと考えられる。これらが古代倭人の魂に繋がっていたと思われる。魏志倭人伝に記されている倭人の特徴は、これらのものと考えられる。

表―８　後漢書、魏志倭人の言葉の解釈（古典 Skr. 解釈）

琉　球　語	言葉の意味〔①Skr.（読み）意味／②／③〕
邪馬台国（やまだい） （倭と奄美大島）	①王朝を抑止する国〔yama（ヤマ）抑止／daiva（ダーイワ）王家の（漢）／〕漢の拡張・朝貢政策を抑止する国 ②対の神の国〔yama（ヤマ）一対の／daiva（ダーイワ）神の／〕伊邪那岐・伊邪那美命の倭とアマミキヨ・シネリキヨの奄美大島は対の同じ神の国
倭面土王（わのめんど） 帥升（すいしょう） 漢字混合語	倭の小国の連合が王に奉った帥升〔倭／melana（メラ）会合・連合／ny-ūna（ヌーナ）小さい・劣る／dā（ド）奉献・捧げる／王／帥升〕
邪馬壱国（やまいち） （日月の対の神の国）	①ヤマの太陽と月の神の国〔yama（ヤマ）ヤマ／īśva（イシァ）神／tigmâṃśa（チグマムス）太陽／tithipraṇī（チチパニー）月／国〕奄美大島と倭とは一対の太陽と月神の国　　チ＋チ＝チー ②ヤマ神の太陽の発する（朝日の）国〔yama ヤマ／iṣ（イス）発する／tigmâṃśa（チグマムス）太陽〕
卑弥呼	①集まって選ばれた最高指導者〔vṛta ヒタ）選ばれた／mil（ミル）集まる／koṭi(コチ)最高指導者〕 ②太陽と月の神の子孫〔vi-mṛtyu（ヒミツ）不死・神／mitra（ミトラ）太陽／mṛga-maśa（ミガマサ）月／kaulya（カーウラ）貴族の子孫〕 夜麻登登母母曾毘賣命の名前と同じ意味がある　ミ＋ミ＝ミー ③遠くの虚偽の最高指導者〔vṛ-mī（ヒミー）遠くの虚偽の／koṭi（コチ）最高指導者〕
南 （前出）	①南、②君主、③朝日の方向
投馬国（つま）	煙で見えない国〔dhūmaya（ヅーマヤ）煙で包む・見えない／〕
出雲国（いずも）	①包む煙を追い払う国①〔iṣ（イス）駆逐する／dhūmaya（ヅーマヤ）見えなくする・煙で包む／〕 ②是認された正しい道を示す国〔iṣṭa（イサ）是認された／dyut（ヅト）示す／mārga（モラ）正しい道／〕
但馬国（たじま）	①黎明を目印に示す〔dhā（ター）示す／dinodaya（ヂノダヤ）黎明／maryādā（マラーダー）目印／〕 ②目的地への方向を与える国〔dhā（ター）与える／dis（ヂス）方向／maryādā（マラーダー）目的地／〕

円山川（まるやまがわ）	**目的地のヤマ神へ上る川**〔maryādā（マラーダー）目的地／ruh（ルフ）上る・達成する／yama（ヤマ）山神・倭／川〕
薩摩国（さつま）	**噴煙で現実が見えない国**〔sat（サト）現実の／dhūmaya（ヅーマヤ）煙で見えない／〕出雲と並ぶ出煙の投馬国、桜島の噴煙で煙る
常世国（とこよ）	①**闇夜の国**〔tāra（トラ）透徹する／kāla(コーラ)黒い／yāmī(ヨミー)夜／国〕 ②**南のヤマの領土の洞穴の国**〔dhāman（トマン）神の領土／koṭara（コタラ）洞穴／yāmya（ヨマ）南の・ヤマに関する／〕鍾乳洞の天国
沖永良部島（おきのえらぶ）	①**蔽われた海の伝説の楽園の地下界の島**〔ogha(オガ)海／kīrṇa（キールナ）蔽われたる／aitihya(アイチハ)伝承・伝説／ramaṇa（ラマナ）楽しませる／bhuvana(ブワナ)地界／〕 ②**蔽われた海の伝説の地下界の神の島**〔ā-kṛ（ogha(オガ)海／kīrṇa（キールナ）蔽われたる／aitihya(アイチハ)伝承・伝説／rasā（ラサー）地下界／bhūta（ブータ）神／〕
ヌンギドコロ	**離れた神の殿堂の暗黒の洞窟の世界**〔nunna（ヌンナ）離別された／gṛha（ギハ）神の殿堂／doṣā（ドサー）暗黒／koṭara（コタラ）洞穴／loka（ロ）世界・場所〕

1　**後漢を抑止する邪馬台国：**大倭王（綏靖天皇＝神沼河耳命）が創った国号

邪馬台国と邪馬壱国に共通の国号のヤマの国は、**要点１**のとおり古事記にある**ヤマ神**の領地の倭（やまとの）国で、中国の王朝国家との違いを示している。古事記の伊邪那岐命と伊邪那美命の国土固成の物語の中で、本州の地名として大倭豊秋津島（おほやまとととよあきつ）があり、大倭のことである。初代神武天皇の和風諡号（わふうしごう）、神倭伊波禮毘古命（やまといはれびこの）の古典 Skr. の意味は、「ヤマ神の聖地（領地）の最も優れた世襲王の武威ある命」である。

天皇との関係は第回３投稿文を見られたい。なお以下、後漢書、魏志倭人伝の要点のみ記す。

邪馬台国は、一対の伊邪那岐命と伊邪那美命の倭国に対し、奄美大島も水・月神のアマミキヨと太陽神のシネリキヨの神の国である。ヤマトンチュとウチナンチュウは、琉球列島から離れた日本列島に渡った民族と大海に囲まれ離れて永住する民族の違いがあるが、太陽神と月・水神の信仰は同じである。

（神沼河耳命又の名建沼河耳命）

後漢書は、邪馬台国の位置について、「倭は韓の東南大海の中にあり、・・」とし、「その大倭王は、邪馬台国に居る。楽浪郡徼はその国を去る万二千里、その西北界拘邪韓国を去ること七千余里。

その地、大較(おおむね)会稽の東冶の東にあり、」と記している。つまり、本州の「大倭王」が「会稽の東冶の東の奄美大島」の邪馬台国に居るとしているが、これは後漢を欺いているのである。その理由は、邪馬台国の国号を創った第二代綏靖天皇の和風諡号神沼河耳(かみぬなかわみみの)命の名前の中に書かれている。

邪馬台国の古典 Skr. による解釈は表―８から二つある。

①**王朝を抑止する国**：邪馬は抑止、台は王家（後漢）のことで、神沼河耳命の名前には、後漢の朝貢の強要を容認しない姿が描かれている。

②**対の神の国：**大倭王の神沼河耳命は、後漢の侵攻を避けるため、天皇の都である倭国と奄美大島の両方を邪馬台国と名づけ、大倭王は大海の中にある奄美大島に居ると後漢を欺いた。これによって、侵攻を避けようとしたのである。奄美大島は、倭と同じ「対の神の島」である。

さて、後漢書に、「安帝の永初元年、倭の国王帥升(すいしょう)等、生口百六十人を献じ、請見を願う」とある。この時に、国王帥升等が「大倭王は、邪馬台国に居る」と伝えたと考えられる。国王帥升は第二代綏靖(すいぜい)天皇で和風諡号の神沼河耳命である。後漢は柵封制とは異なる朝貢を強要する。

（神の国「倭」は王国に従属しない）

要点２より

①**神沼河耳命**(かみぬなかわみみの)**＝**❶ヤマ神（倭）が漢に劣る（従属）と認めない命

＝❷ヤマ神への案内を入変えて後漢の王を欺く命

②別名**建沼河耳命**(たけぬなかわみみの)**＝**❶南方の引き離された海の中心で英雄の方向を迷わす命

＝❷有能な首長が集まって新しい国創りを進めることを促す命

古事記では、綏靖天皇は、朝貢を強く求める後漢への恭順派の庶兄當藝志美美(まませたぎしみみ)命を殺し、後漢への従属を拒否するため、大倭王が居るとして邪馬台国（奄美大島）を入変えて欺いたのである。後漢に奉貢朝賀し従属国となった奴国の失敗を繰返さないことが目的であり、後漢の侵攻の及ばない遠く奄美大島に都があると迷わせたのである。（投稿③参照）

なお奄美大島は、①月と太陽の神の島、②月・海神の南の島で、南の邪馬台国の意味がある。

唐の時代の事典翰苑(かんえん)にある倭面土(めんど)王帥升は、倭の小国の連合が帥升を王に奉った意味である。弱小の連合国が後漢の侵攻を避けるため一致して帥升の方針を支持し王に奉ったのである。

邪馬台国の後漢書に記されている唯一の位置は、図―１　のとおり。なお、その西北界拘邪韓国から真東に北緯 34.5 度線が通っており、朝日の昇る太陽光線方向に奈良の纏向がある。つまり西北界拘邪韓国を頂点に東と南に邪馬台国がある。

（緯度経度による地点間距離）

短里：１里＝70～100ｍ　　7000 余里＝490ｋｍ以上～700ｋｍ以上

西北界拘邪韓国へ奈良纏向からの距離概略 850㎞

西北界拘邪韓国へ奄美大島からの距離概略　700㎞

表―９　後漢書の邪馬台国の位置と距離　　図―１参照

後漢書の表記	大倭王居邪馬臺国楽浪郡徼去其國萬二千里去其西北界句邪韓國七千里其地大較在會稽東冶之東與朱崖儋耳相近 （解釈）大倭王は邪馬台国に居る、楽浪郡徼その国を去ること一万二千里、その句邪韓國の西北界を去ること七千里、その地大むね會稽東冶之東に在り、與朱崖儋耳と相近い
邪馬台国までの距離	楽浪郡から邪馬臺国まで１万 2000 里 句邪韓國の西北界から邪馬臺国まで 7000 里
邪馬台国の位置	大較（おおむね）會稽東冶の東に在り

要点２　綏靖天皇の和風諡号の解釈、神沼河耳命（かみぬなかわみみの）又の名建沼河耳命（たけぬなかわみみの）

神（かみ）＝不死・不滅〔karṣṭum（カルスム）取り去る／mṛ（ミ）死ぬ・破滅する〕雷神の意味も
奄（あま）＝神・不滅・不死〔amara（アマラ）天・神・不死の・不滅の〕琉球語

①神沼河耳命（かみぬなかわみみの）＝❶ヤマ神（倭）が漢に劣る（従属）と認めない命〔神／ny-ūna（ヌーナ）劣っている／河（かわ）（漢）／mṛṣ（ミス）認める／mṛj（ミジ）除き去る／命〕

＝❷ヤマ神への案内を入変えて漢の王を欺く命〔／ny-ūbja（ヌーバ）覆された／nāya（ナーヤ）案内／河（かわ）（漢）／vīra（ミラ）英雄（王）／mī（ミー）欺く／〕倭と奄美大島の一対の邪馬台国のうち、大倭王が居るのは奄美大島と欺く。

②建沼河耳命（たけぬなかわみみの）＝❶南方の引き離された海の中心で英雄の方向を迷わせる命〔dakṣina（ダクシナ）南の／ketana（ケタナ）場処／nunna（ヌンナ）離別された／kakṣā（カカー）中心／vāri（ワーリ）大海水／vīra（ミラ）英雄（王）／mi（ミ）迷う／命〕奄美大島

❷有能な首長が新しい国創りを進めることを集まりで促す命〔dakṣina（ダクシナ）能力ある／ketu（ケツ）首長／nud（ヌド）進める／nava（ナワ）新しい／kartum（カツム）作る／vasudhāk（ワスダーク）国土／mil（ミル）集まる／vī（ミ）促す／〕

③漢委奴国王印（かんのいのぬの）＝漢に委ねたしもべの国王印：後漢書の記述の漢の光武帝から賜った印綬

注　神武天皇の和風諡号　神倭伊波禮毘古命（かみやまといはれびこの）の二つの別名は東征の原因を記している。
①若御毛沼命（わかみけぬの）＝後漢に従属を熱心に要求された指導者の命　②豊御毛沼命（とよみけぬの）＝従属の熱心な要求を拒絶した指導者の命　　（投稿③参照）

古事記の伊邪那岐命と伊邪那美命に対する琉球のアマミキヨ、シネリキヨの歴史的な関係の記録はない。奄美大島の名前の意味や経緯も全く不明であるが、一方で後漢書の邪馬台国や魏志倭人伝の邪馬壱国と古事記の天皇の和風諡号の意味は、全体として整合がある。

２　魏と同盟する邪馬壱国：卑弥呼（夜麻登登母母曾毘賣命）が創った国号

後漢と対等か従属かをめぐって内乱にあった倭国も、中国三国時代に入って、ようやく女王をたて国家統一を達成した。魏といち早く親交を結んだ女王は、親魏倭王の金印紫綬を得て、国号を邪馬壱国とした。**要点３**より、古事記の記述の、卑弥呼にあたる第七代孝霊天皇の御子
夜麻登登母母曾（やまとともも そ）毘賣命の兄弟関係等は、魏志倭人伝の記述に一致している。

ここに邪馬壱国の名称の Skr. 解釈は、次のとおり。

邪馬壱国＝
要点１の解釈❶対等の同盟国
　　❷ヤマ神の聖地の国

❶は、魏と倭国が同じ目的を持つ一対の同盟国であることを示している。❷は邪馬壱国が倭国であることを示している。

次に表―８の解釈から
①**ヤマの太陽と月の神の国：**日月神の伊邪那岐命と伊邪那美命の国
②**ヤマ神の太陽の発する（朝日の）国**

①は、邪馬壱国は、日月神の国で、倭国と奄美大島は同じ神の国であることを示している。

ここで、**要点３**の夜麻登登母母曾毘賣命の名前は、❶遠い昔のヤマ神の父と月神を母とする毘賣命で、自ら邪馬壱国を担う天孫であるとする意味がある。すなわち伊邪那岐命と伊邪那美命の子孫である。夜麻登登母母曾毘賣命は、国内の戦乱を止め親魏倭王となり倭国発展の基礎を築く功績を挙げた。その周りには大吉備諸進、大吉備津日子命など有為な人材が居て、この時創った国号が自らの名前を付けた邪馬壱国である。

魏志倭人伝は、「郡（帯方）より**女王国**に至る万二千余里。・・・・・・その道里を計るに、当に会稽の東冶の東にあるべし。」と記している。女王国は、奄美大島であり倭国と奄美大島は共に邪馬壱国である。表―９参照

しかし、女王が奄美大島に居ることは虚偽である。つまり女王卑弥呼の名前には、「遠くの虚偽の最高指導者」の意味がある。魏は、呉蜀と戦乱の中にあり、女王国は、魏の同盟国として「大較（おおむね）会稽の東冶の東の国」の奄美大島で呉の東の大海の背後にあるとして女王自ら位置を欺いたのである。

一方で東の邪馬壱国の位置は、②ヤマ神の太陽の発する（朝日）の国として明示されている。

要点３　夜麻登登母母曾毘賣命等の名前の解釈

①夜麻登登母母曾毘賣命＝❶遠い昔のヤマ（太陽）神の父と月神を母とする毘賣命〔yama（ヤマ）ヤマ神／tāta（トタ）父／tāvat（トワト）それ程長い／mātṛ（モチ）母／maula（マーウラ）遠い昔から／soma（ソーマ）月神／／〕日月神（壱：イチー）の天孫の命

＝❷争いを止め王冠と印綬の贈与を受けた毘賣命〔yama（ヤマ）抑止／toditum（トヂツム）粉砕する［内乱］／dhā（ト）得る／mauli（マウリ）頭・頂上・王冠／maudrika（マウドリカ）書字・造印者［印綬］／śā（ソ）贈与する／／〕

②大吉備諸進（おほきびのもろすすの）＝女王の印綬を魏から得た命〔魏／maudrika（マウドリカ）書字・造印者［印綬］／rājñī（ロジニー）女王／śūśuvas（シュシュワス）勝利を得る〕孝霊天皇の兄、夜麻登登母母曾毘賣命の叔父

難升米（ナムショウマイ）＝南は計略と教える〔難［南］（ナム）／śās（シャース）教える／māyin（マーイン）計略〕大吉備諸進の魏志倭人での名前：邪馬壱国を伝えたと考えられる

③大吉備津日子命（おほきびつひこの）＝魏へ到達した天孫の命〔魏／tul（ツル）到達する／／〕夜麻登登母母曾毘賣命の実弟：載斯烏越（サイウシエチ）は魏志倭人伝での名前。

④壱與（いちよ）＝日月神と密接に結合する〔īśva（イシァ）神／tigmâṃśa（チグマムス）太陽／tithipraṇī（チチパニー）月／yād（ヨド）密接に結合する〕夜麻登登母母曾毘賣命を継いだ女王の倭飛羽矢若屋比賣（やまととびはやわかや）、

（卑弥呼の墓とされる纒向の箸墓古墳の正式名称は大市墓）

⑤大市墓＝日月神の血統の墓〔āvali（オワリ）血統／（壱）日月神〕大市は大壱で夜麻登登母母曾毘賣命の別名と考えられる。

３　卑弥呼と大市（壱）媛（ひめ）

魏志倭人伝は、「倭国乱れ、相交伐すること歴年、・・・・・・一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼という。」と記している。表―８から

卑弥呼＝①集まって選ばれた最高指導者

②太陽と月の神の子孫：夜麻登登母母曾毘賣命の名前と同じ意味

③遠くの虚偽の最高指導者：奄美大島の女王

卑弥呼の名前を見ると、上記三つ内の②太陽と月の神の子孫の意味は、邪馬壱国を担う天孫の意味で、③遠くの虚偽の最高指導者の意味は、南の邪馬壱国の偽りの女王のことである。

結局、倭国と奄美大島は同じ国号の邪馬壱国である一方、夜麻登登母母曾毘賣命は、あくまでも倭国の女王で、見せかけの奄美大島の女王である。これは、後漢書の邪馬台国と同じように時の大陸の王朝をめぐる情勢に対応した国策であったのであろう。

さて、孝霊天皇の第四后は、蝿伊呂杼(はえいろど)の名前で第三后とは姉妹で、神々に祈願する神官であったと考えられる。（表―５参照）つまり夜麻登登母母曾毘賣の母にあたる三后意富夜麻登玖邇阿禮比賣(おほやまとくにあれ)も高位の女性神官で、琉球列島の化身のオナリ神と類似の立場と考えられる。一方古事記と琉球列島の常世国、琉球列島のアマミキヨ・シネリキヨと古事記の伊邪那岐命・伊邪那美命の神話、そして何より古典 Skr. と神の繋がりは、邪馬壱国と奄美大島の繋がりを感じさせる。

以上のように見てくるとウチナンチュウとヤマトンチュウが分かれて以来、言葉や人種の混交も進んだと考えられるが、古代、琉球列島と倭国の間に強い繋がりがあったとも思われる。

（邪馬壱国と大市（壱）媛と箸墓古墳）壱が解く古代史

夜麻登登母母曾毘賣命の名前の意味、**要点３**の❷「遠い昔のヤマ（太陽）神の父と月神を母とする毘賣命」は、太陽と月の子孫で「**大壱毘賣命**〔āvali（オワリ）血統／（壱）日月神／毘賣命〕と同じ意味である。奈良県纒向にある夜麻登登母母曾毘賣命の墓とされる箸墓古墳の名称の「**大市墓**」に繋がって、大市＝大壱であろう。箸墓の「箸」は、古事記神話で夜麻登登母母曾毘を貶めるために作り変えられたと考えられる。（参照：投稿③：2022 年 8 月）

（卑弥呼を継ぐ女王 壱與は倭飛羽矢若屋比賣）

壱與(いちよ)＝日月神と密接に結合する〔īśva（イシァ）神／tigmâṃśa（チグマムス）太陽／tithipraṇī（チチパニー）月／yād（ヨド）密接に結合する〕：ヤマ神と卑弥呼・夜麻登登母母曾毘賣命に密接に関係する意味。卑弥呼を継いだ女王 壱與は、古事記の夜麻登登母母曾毘賣命の妹の倭飛羽矢若屋比賣(やまとととびはやわかや)にあたる。魏志倭人伝の倭の二代の女王と古事記の夜麻登登母母曾毘賣命の名前の意味に共通する「壱」は、古代史を解く鍵である。

４　古事記の常世国

琉球列島には、太古にサンゴ礁が隆起してできた多くの鍾乳洞がある。ウシヌガマと呼ばれる洞窟の家は、先の大戦で避難所や防空壕として多数の人々を収容した。古事記に、神武天皇の兄の御毛沼(みけぬ)命が常世(とこよ)國に渡られたとの記述がある。常世國は、表―８より、①闇夜の国、②南のヤマの領土の洞穴の国の意味がある。沖縄本島と奄美大島の間にある沖永良部島の古典 Skr. の解釈は、海と光の伝説の楽園の地下界の島の意味があり、東洋一とされる鍾乳洞では、かってシニグ祭りの場として、ヤマ神との関係があった所とされている。こうした鍾乳洞がヤマ神の地下の楽園として、古事記神話に常世国として記されたのであろう。なお、琉球のニライカナイなど常世国は、さらに南にあるとされている。さて、祖霊と神々が共に暮らすヤマの楽園は、天界から地下に移った常世国のヤマの地下の楽園であり、地域にある鍾乳洞は永く**殯**(もがり)の場として使用され、**ヌンギドコロ**と呼ばれて怖しいの意味に使われてきたとされる。**ヌンギドコロ**の意味は古典 Skr. で、「離れた神の殿堂の暗黒の洞窟の世界」で常世国のことである。古代、ヤマの教義は、輪廻転生、霊魂不滅であり、輪廻から解脱した魂がヤマの楽園で暮らすのは人々の理想であったとされる。ヤマ神は、人々の虚偽を裁く神であるが、慈悲深い存在でもあり、ヤマの殿堂は魂の楽園とされたのであろう。琉球列島には、こうした鍾乳洞が各地にあり古代の貴重な遺産である。

５　邪馬壱国への道

魏志倭人伝は、「**南、投馬国に至る水行二十日、・・・・・南、邪馬壱国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月。**」と記している。この文は、魏と同盟する邪馬壱国が奄美大島であると呉に思わせるためのものである。

表―１０のとおり、**南**＝①**南の方向の道は**、伊都国から南水行２０日西南へ平戸瀬戸を通って桜島の噴煙で現実が見えない薩摩国に至る。更に南へ水行 10 日では次の陸行１月の方向が見当たらない。ここからの道筋は、南に奄美大島の邪馬壱国に至るようには示されていない。

南＝②君主は、具体的方向がない。

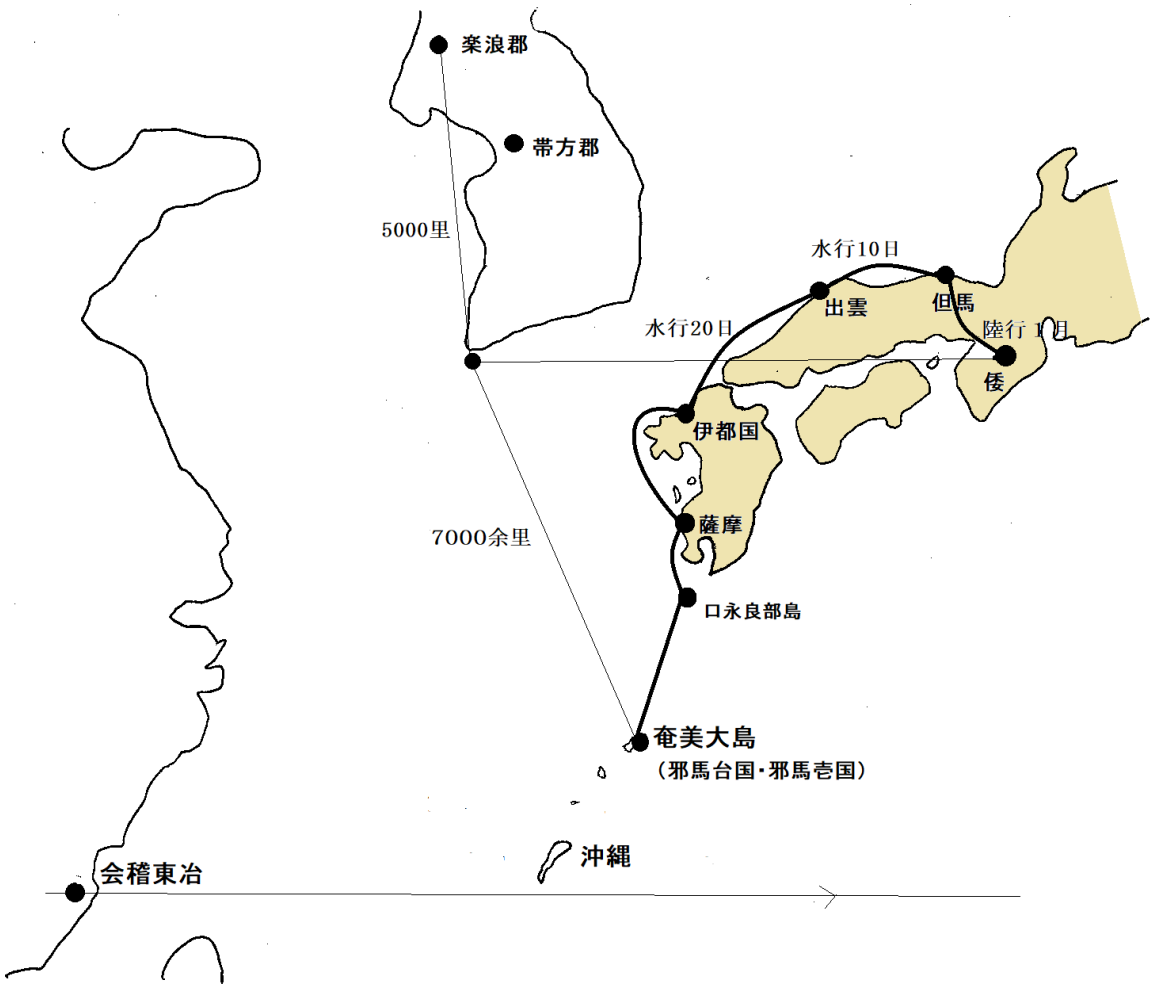
南＝③朝日の方向は、日本海と瀬戸内海の道がある。日本海では、伊都国から東へ水行２０日、煙を払う・正しい道の出雲国に至る。ここで「南邪馬壱国に至る」は、表―８の**邪馬壱国の意味の**「ヤマ神の太陽の発する（朝日）国の」にあたる。さらに水行　１０日で但馬国がある。ここから陸行１月、内陸に向けて円山川が入り込んでいる。円山川は、目的地の倭国へ上る川の意味である。（投稿①参照）

なお、瀬戸内海では、陸行一月とならない。）

表―１０　邪馬壱国への道

（原文）　①南至投馬國水行二十日・・・・・・南至邪馬壹国女王之所都水行十日陸行一月
要点１⑦南の解釈には、漢字と古典 Skr. の三つがある。 南＝①本来の南の方向 ＝②君主（王）へ：具体の方向が明らかでない ＝③朝日**の方向**　：**表―８の邪馬壱国の意味**：ヤマ神の太陽の発する（朝日）の国 南至投馬國水行二十日・・南至邪馬壹国女王之所都水行十日陸行一月 解釈①南へ水行 20 日で噴煙で現実が見えなくなる薩摩国に至る、さらに南へ 10 日、陸行１月の陸が見当たらない。 解釈③朝日の東の方向へ水行 20 日で正しい道を示す国（出雲国：大倭の本州）に至る、都へ水行 10 日但馬に至る、陸行１月但馬から山城を経て女王之所都の邪馬壹国に至る。 参考　図―１のとおり
②自郡至女王国萬二千餘里 楽浪郡より女王国に至るに一万二千余里　図―１のとおり

図―１　邪馬台国と邪馬壱国の位置とルート



別表　　沖縄語を古典 Skr. で解く

琉球語	解　釈〔Skr.（発音仮名）意味／　／〕
東：アガリ	輝きの会来に礼拝〔ā-gati（アーガチ）会来・起源／ṛc（リチ）輝く・礼拝する〕太陽・火神への礼拝
南：　フエー	火を燃やす〔hutāśa（フタシャ）火・アグニ火神／edha（エーダ）燃やす〕燃料を供える
西：イリ	輝きを送る〔il（イル）送る／ṛc（リチ）輝く・礼拝する〕
北：ニシ	夜になる〔niśā（ニシャ）夜・夢／i（イ）到達する〕
アグニ	火神〔agni（アグニ）火神〕
アミ：雨	雨〔amṛta（アミタ）水・甘露・神酒〕
アマウェーダ：天親田	神の地の祭祀〔ama（アマ）天・神／veda（ウェーダ祭祀の知識／dhāman（ダーマン）神の領地〕
アンマー：母親	血を分けた母〔aṃśa(アンサ)部分・分け前／mātṛ（マーティ）母〕
イチュン：行く	今動き行く〔i（イ）行く／cyu（チユ）動く／nu（ヌ）今〕
イチュタン：行った	行った〔i（イ）行く／cyu（チユ）去る／tanta（タン）達す〕
イージュン：泳ぐ	揺れ動き進む〔īj（イジュ）揺れ動く／nud（ヌド）推進する〕
イン：犬	犬〔i（イ）挑戦する／nu（ヌ）吠える〕
ウィナグ：女	女の属性を想像認知する〔ūh（ウーフ）想像する／īkṣ（イクス）認知する／nārī（ナーリー）女／guṇa（グナ）属性）〕
ウィキガ：男	女のないものを想像認知する〔ūh（ウーフ）想像する／īkṣ（イクス）認知する／istrī(イストリー)女／gata（ガタ）～のないもの〕
ウグヮン：神仏への願い掛け	かみへの秘密の祈願〔uktha（ウクタ）祈願／guh（グフ）秘密にする／ambaraukas（アムバラウカス）神〕
ウフアンマー伯母	想像する母〔ūh（ウーフ）想像する／母親〕
ウミ：海	海〔ūrmi（ウーミ）海・波〕

オモロ	歓喜してぞくぞくする〔āmoda（オモ）歓喜／romāñca（ロマンチャ）ぞくぞくする〕
ウムイ	思いを歌にする〔ukti（ウクチ）歌／muc（ムチ）放つ／icchā(イッチャー)切望〕
カー：井戸	井戸〔khā(カー)井戸〕
カタサン：固い	驚く固さ〔kaṭhora（カトーラ）固い／tarj（タルジ）驚かす／santa（サンタ）である〕
川：カーラ	水の流れ〔ka（カ）水／raṃh（ラン）流れる〕
加那：カナ	恋人〔kanta（カナ）愛しい〕
カーラバンタ：川端	川の堤〔川／bandhana（バンタナ）堤で囲む〕
ガマ：洞窟	洞窟の家〔gaha（ガハ）窟／māna（マーナ）家〕
カムン：食べる	食べる〔khād（カード）食べる／mud（ムド）楽しむ／nu（ヌ）称賛する〕
カンゲーユン：考える	正に掘り返して深く瞑想する〔khan（カン）掘り返す／ghem（ゲーム）正に／yuj（ユジ）深く瞑想する／nud（ヌド）推進する〕
カンナイ：雷	輝き叫び吠える神〔kaś(カス〕輝く／nu（ヌ）叫ぶ／nad（ナド）吠える／īśva（イーシュワ）神)
クジュ：去年	失効した太陽の年周期〔kuṇṭh（クント）無効／diva-kara（ジヴァカラ）太陽／yuga（ユガ）年周期〕
グクンレー：結婚式	新しい家族の世代を宣言する〔gu（グ）宣言する／kuṭumba（クツマ）家族／nūtana（ヌータナ）新しい／retas（レータス）世代〕
グソ：あの世	見えない永遠の休息〔gūḍha（グーダ）見えない／śānti（ソンチ）死・永遠の休息〕
クトゥシ：今年	穀物を食べて過ごせることを祈る〔kruś（クス）祈る／dhānyâda（トナーダ）穀物を食べる／uṣita（ウシタ）過ごされる〕
クガニイル 金色	輝きに目を引き付ける欺く黄色〔kuṭ（クト）欺く／gau（ガーウ）黄色／nī（ニー）引き付ける／īkṣaṇam（イクサナム）目／ruc（ルチ）輝き〕
クチ　口	叫び咬み切る〔kū（クー）叫ぶ／chid（チド）咬み切る〕
クミ：米	栄養のある種子〔kṣu（クス）栄養物／vīja（ミジャ）種子〕
クルー　黒	黒色〔kṛṣna（クリスナ）黒／rūpa（ルーパ）色・形〕

クゥ：子	家族の子供〔kuṭumba（クツマ）家・家族/vatsa（ワタ）子供〕
クゥッチーサビラ：頂きます	食物を食べ満足し体を保つことを願う〔kṣu（ク）食物／bhakṣ（ブハクス）食べる／tṛp（チプ）満足する／śarīra（サリーラ）身体／bhṛ（ビ）保つ／laṣ（ラス）願う〕
クゥッチーサビタン：御馳走様	食物を食べ満足し体力の保持に感謝〔kṣu（ク）食物／bhakṣ（ブハクス）食べる／tṛp（チプ）満足する／śarīra（サリーラ）身体／bhṛ（ビ）保つ／dhātu（ターツ）体力／nu（ヌ）賛辞〕
シマクトバ	島で音を発し通じる言葉〔sīman（シーマン）しま／kuj（クージ）音を発する／tāra（トラ）貫通する／bhāṣā（バーサ）言葉〕
チチ：月	月〔tithipraṇī(チチパニー)月〕
チチヌユ：月夜	夜と曙を追う月〔tithipraṇī(チチパニー)月／nud（ヌド）追う／yuvati（ユワチ）夜と曙〕
チブル：頭	認知し語り表情で現わす〔ci（チ）認知／brū（ブー）語る・伝達する／rūpaya（ルーパヤ）無言劇を演じる〕
チム：肝臓	治療の要所〔cikitsā(チキト)治療／mūla（ムーラ）要所・発端〕
チムビル：心の広い人	心の根が広い姿〔citta（チッタ）心／mūla（ムーラ）根・基底／bṛhat（ビハト）広い／rūpak（ルーパ）姿・形〕
チュ：人	人種・種族〔cihna（チフナ）特徴・形貌・属性／yūthya（ユトヤ）人の群れ〕
チュー：今日	賦与された日〔tithi（チチ）太陰日／yukui（ユクチ）賦与された〕
チラ：顔	容姿が現れる〔cihna（チナ）形貌／laks（ラクス）として現れる〕
ティ：手	為すべきことをなす〔dheya（テーヤ）なされるべき／iṣ(イス)やろうとする〕
トゥイ：鳥	高く渡り動く〔tāra（トラ）渡る／ucca（ウッチャ）高い／iṅg(イング)動く〕
トゥー：平坦	広い平面〔tala（タラ）平面／audārika（アーウダーリカ）広い〕 タ＋アーウ＝トウ
トゥーサン：遠い	遠く通じると想像する〔tāra（トラ）貫通する／uru（ウル）遠い／śaṅk(サンク)想像する〕
トゥジ：妻	夫の近くに保持された〔dhārita（トーツ）保持された／upa（ウパ）近く／jīviteśa（ジーヒテサ）夫〕
トウスイ：年寄	体力が衰え頼るに足りない〔dhātu（トリタ）体力／ud-śuṣ（ウスス）枯れる／itvara(イタラ)頼るに足りない〕

トゥリ：凪	高い空を吹く〔thmā（トマー）吹く／ucca（ウッチャ）高い／rikta（リカタ）空〕
ナカ：中	囲まれた中心〔naddha（ナッタ）囲繞された／kakṣā（カコ）中心〕
ナーチャ：翌日	更新された太陽〔navi-kṛ（ナヒキ）更新する／caṇḍa-kara（チャナカラ）太陽〕
ナガサン：長い	蛇を想像する〔nāga（ナーガ）蛇／śaṅk(サンク)想像する〕
ナスン：産む	家系の子を産み非常に喜ぶ〔nahuṣa（ナフサ）家系／sū(スー)子を産む／nu（ヌ）非常に喜ぶ〕
ナダ：涙	悲しみの水〔nāra（ナーラ）水・人に属する／daya（ダヤ）悲〕
ナチュン：泣く	傷つき拒み叫ぶ表現〔naṭ（ナト）表現する／chid（チド）傷つく／yup（ユプ）拒む／nu（ヌ）叫ぶ〕
ナミ：波	流水の波〔nadī(ナヂー)流水／vīci（ミチ）波〕
ニンジン：人間	思考を進める故の人間〔nṛ（ニ）人間／nu（ヌ）故に／dhī（ジー）思考／nud（ヌド）推進する〕
ヌガシ：どうやって	遂行する方法に困惑する〔unmugdha（ウヌガ）困惑した／gati（ガチ）方法／siddhi(シッディ)遂行〕
ヌーヌトゥイ：野鳥	離された自由な鳥〔unmuc（ウヌチ）自由にする／nunna（ヌンナ）離別された／鳥　〕
ハナ：鼻	上に出た鼻〔hartum（ハルツム）上に保つ／nāsikā(ナーシカー)鼻〕
ハニ：羽	導く翼〔pattra（パットラ）翼・羽毛／nī（ニー）導く〕
ハーヤ：柱	支えるべき太い棒〔hārya（ハーラ）支えられるべき／yaṣṭi(ヤシ)太い棒〕
断崖：バンタ	堤防・阻止〔bandhana（バンタナ）堤で囲む〕
ヒーサン：寒い	寒い〔hima（ヒマ）寒さ／santa（サンタ）である〕
ヒジュルサン：冷たい	寒さに苦しめられ悩まされる〔hima（ヒマ）寒さ／dīna（ヂーナ）苦しめられる／yuta（ユタ）加えられた／ruṣ（ルス）悩まされる／santa（サンタ）である〕
ビョーチ：病気	病気を知覚する〔vyādhi（ビヨヂ）病気／ci（チ）知覚する〕
ヒラ：ヒレ	ヒレ〔vi-lamba（ヒラマ）垂れ下がった腕〕

フィカジ：寒風	寒い天の息〔hima（ヒマ）寒さ／kha（カ）天空／jiva（ジワ）息〕hi＝ヒ＝フィ
フィサ：足	活動する足〔viṣ（ヒス）活動する・働く／sākhā（サーカー）手足〕vi＝ヒ＝フィ
フィルサン：広い	広い情況である〔vipura（フィプラ）広い／rūpa（ルーパ）情況／santa（サンタ）ある〕
フィル：昼	まばゆく輝く〔vi-ruc（フィルチ）まばゆく輝く〕
フゥシ：星	夥しい青白い星〔puṣkala（プシカラ）おびただしい／uḍu（ウヅ）星・月宿／sita（シタ）青白い〕pu÷フ
フク：肺	内蔵の包容物の肺〔phupphusa（プップサ）肺／kuṣṭhika（クシカ）内蔵の包容物〕
フクマーミ：心臓	中央の肺に結合した〔肺／madhya（マトヤ）中央の／milita（ミリタ）結合した〕
フーチャ	気まぐれに吹く〔phut（プト）ぷっと吹く／capara（チャパラ）気まぐれな〕
フディー：稲光	響き渡り光る〔hum（フム）響き渡る／div（ディヴ）光る〕
パタイ：死	滅亡して去る〔patana（パタナ）落下・滅亡／i（イ）去る〕死
船：フニ	船〔plu（プ）航海する／nī(ニ)導く〕
マーミ：豆	豆の種子〔māṣa（マーサ）豆／vīja（ミジャ）種子〕
マギサン：大きい・太い	大きいことを称賛する〔mahat（マハト）大きな・長い・高い・深い・粗大な／gṛ（ギー）称賛する／santa（サンタ）である〕
マジュン：一緒に	分かれた二つを結合する〔mā(マー)区分する／dvika（ジカ）二つの／yuta（ユタ）結合／nud（ヌド）推進する〕
マットバー：正直者	正しい用法で量る正法な分配〔mārga（マーラ）正しい用法／tul（ツル）量る／dhārmikī（トルミキー）正法な／bhaj（バジ）分配〕
マブイウティ：魂が抜ける	魂は上の太陽に行く〔魂／ud-teja（ウドテージャ）上の太陽／i（イ）行く〕魂の解脱
マブヤーウティ：魂が抜ける	魂は上の太陽に去り行く〔mānasaka（マナサカ）心／bhūta（ブータ）精霊／yā(ヤー)去る／ud-teja（ウドテージャ）上の太陽／i（イ）行く〕魂の解脱
ミー：目	会う〔mil（ミル）会う・顕れる〕
ミーウティ：臨終	死に上の太陽に行く〔mṛ（ミ）死ぬ／ud-teja（ウドテージャ）上の太陽／i（イ）行く〕

ミートゥ：夫婦	夫婦〔mithuna（ミトゥナ）夫婦〕
ミーユミ：新婦	夫婦の輝く若い女性〔mithuna（ミトゥナ）夫婦／yuvati（ユワチ）若い女性／miṣ（ミス）輝く〕
ミーメ：見舞	面会で会う〔mil（ミル）会う／mela（メラ）面会〕
ミジ：水	自ら動く波〔vīci（ミチ）波／jinv（ジンヴ）自ら動く〕
ミミ：耳	目を閉じて感知する〔mīl（ミール）目を閉じて見る／mi（ミ）感知する〕
ミヤラビ：乙女	輝くより愛らしい明るい少女〔miṣ（ミス）輝く／yavīyas（ヤミヤス）より若い／ramaṇī（ラマニー）愛らしい女／bṛhat（ビハト）明るく〕
ムーク：婿	家族の要〔mūla（ムーラ）要／kuṭumba（クツンバ）家族〕
ムコ：額	顔の先端〔mukha（ムカ）顔・口／agra（アグラ）前部〕kha＋a
ムドゥユン：戻る	高度な任命から低いところへ逃走して離れる〔muc（ムチ）離れる／drā(ド)逃走する／unata（ウナタ）高い／yuji（ユジ）任命する／ｎｙ-ūna（ヌーナ）低いところ〕
ムヌ：食べ物	口に移すもの〔mukha（ムカ）口／nutta（ヌッタ）移す〕
ムル：全部	根底からの形〔mūla-āt（ムーラアート）根底から・徹底的に／rūpa（ルーパ）形〕
メーナチ；毎日	夜が遮ることの集まり〔melaka(メーラカ)集まり／naktaṃ（ナカム）夜／chid（チド）遮る〕
メーユル；毎晩	光が消えたことの集まり〔melaka(メーラカ)集まり／yup（ユプ）消える／ruci（ルチ）光〕
メンソーレ：いらっしゃい	面会が間違いなく全ての者にとって有益となるよう叫ぶ〔mela（メラ）面会／nu（ヌ）称賛する・叫ぶ／sārva（ソラ）全てのものにとって有益な／eva（エワ）動く〕
ヤ：　家	家〔yatratya（ヤトラタ）そこに居住する〕
ヤーニンジュ：家族	家の人々が合同で生活を推し進める〔家／nṛ（ニ）人々／nud（ヌド）推し進める／jiva（ジワ）生活する／yuta（ユタ）合同〕
ヤーン：来年	求める新しい１年〔yac（ヤチ）求める／ābdam（アーバム）１年間）／nūtana（ヌータナ）新しい〕
ヤチュン：焼く	火を使い消す〔yam（ヤム）使用する／tigmāṃśu（チガーム）太陽・火／yup（ユプ）消す／nu（ヌ）既に〕

ヤナー：悪人	悪魔人間〔yātu（ヤーツ）悪魔／nara（ナラ）人〕
ヤマ：森・林・山	樹・山を保つ〔yam（ヤム）保つ・従う／aga（アガ）樹・山〕
ユイマール：助け合い	合同して所有し与え支える〔yu（ユ）合同／īś（イース）所有する／maṃh（マムフ）贈与する／rudh（ルト）支える〕
ユーバン：夕飯	太陽から遠ざかった食べ物〔yu（ユ）遠ざかる／bhānu（バーヌ）太陽／anna（アンナ）食べ物〕
ユカフ：豊年	年周期の穀物の栄茂〔yuga（ユガ）年の周期／kana（カナ）穀物／phullita（プッリタ）栄茂〕
ユサンディ：夕方	消え沈んだ天〔yup（ユプ）消える／sad（サド）沈む／nu（ヌ）既に／daiva（ダーイヴァ）天〕
ユタ：巫女	神と接合する〔yuj（ユジ）接合する／taitila（ターイチラ）神〕
ユル：夜	光が消える〔yup（ユプ）消える／ruci（ルチ）光〕
ユンター：お喋り	僚友と騒々しい〔yuñj（ユンジ）一緒になった・僚友／tāra(ターラ)騒々しい〕
ワー：私	我々〔vayam（ワヤム）我々〕
ワカサン：若い	強くした身体である〔vakṣaṇā（ワカナ）元気づける・強くする／kāya（カーヤ）身体／santa（サンタ）である〕〕
ワタ：腹	身体の腹〔vakṣaṇā（ワカサナー）腹／tanū（タヌー）身体〕
ワチ：脇	胸の横〔vakṣas（ワクサス）胸／tiryañc（チランチ）横の〕
ワチミチ：脇道	胸の横の道〔vakṣas（ワクサス）胸／tiryañc（チランチ）横の／vī-thi（ミチ）路・街道〕
ワライン：笑う	声を出し喜び揺れる〔vāṇī（ワーニー）声を出すこと／ram（ラム）喜ぶ／iṅg（イング）揺る〕
ワラビ：子供	養われ守られた子供〔vatsa（ワタ）子供／rakṣitā(ラキター)守られた／bhṛta(ビタ)養われた〕
ンマ：馬	乗る馬〔unnam（ウンナム）上る／maya（マヤ）乗る馬〕
ンカシ：昔	離れた時間の昔〔nunna（ヌンナ）離別された／kāla（カーラ）時／cira（チラ）昔の〕
ンジャサン：苦い	刺激された非常に哀れな苦痛である〔nunna（ヌンナ）刺激された／dīnaka（ヂーナカ）非常に哀れな／yantraṇa（ヤンタナ）苦痛／santa（サンタ）である〕

ンージュン： 見る	周辺を照らし出し目を開く〔unna（ウンナ）周辺／dyut（ジュ）照らし出す／unmīl（ウンミール）目を開く〕unna＝ud
ンーチャン： 見た	周辺を既に見た〔unna（ウンナ）周辺／cakṣ（チャクス）見る／nu（ヌ）既に〕

参考文献

島袋盛世　「沖縄語をさかのぼる」2021　白水社

御代英資　「沖縄エイサー誕生ばなし」2008　東洋出版

井上頼圀・上田万年・本居豊頴「校定古事記」1911 皇典講究所

舎人親王　「日本書紀」30 巻〔4〕1610（慶長 15）
編者晋陳寿撰「三国志 65 巻（魏志・東夷伝・倭人）」1670　村上勘兵衛・山本平左衛門刊

范嘩（宋）編；章懐太子（唐）注；劉昭（梁）注補「後漢書東夷伝倭」

ピエール＝シルヴァン・フィリオザ著　竹内信夫訳「サンスクリット」〔文庫クセジュ〕白水社

倉野憲司　校注「古事記」2011 年岩波文庫

辻直四郎訳「リグ・ヴェーダ賛歌」2012 年岩波文庫

辻直四郎訳「アタルヴァ・ヴェーダ賛歌　古代インドの呪法」2014 年岩波文庫

上村勝彦「インド神話　マハーバラタの神々」2011 年ちくま学芸文庫

服部正明「古代インドの神秘思想」2005 年講談社学術文庫

山下博司「ヒンドゥー教」2004 年講談社選書メチエ

J. ゴンダ著、鎧淳訳「インド思想史」2002 年岩波文庫

立川武蔵・石黒淳・菱川邦男・島岩　共著「ヒンドゥーの神々」1984 年せりか書房

前田專學「インド哲学へのいざない」2000 年 NHK 出版

石原道広編訳「魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隨書倭国伝」2011 年岩波書店

早島鏡正・高崎直道・原　実・前田專學　著「インド思想史」1997 東京大学出版会

メアリー・ボイス、山本由美子訳「ゾロアスター教」2010 株式会社講談社

伊藤義教訳『アヴェスター』2012 ちくま学芸文庫）

平岡昇修　著「初心者のためのサンスクリット辞典」2012　世界聖典刊行協会

（財）鈴木学術財団「大梵和辞典」2015（株）黒岩大光堂

BEARBEITET VON OTTO BÖHTLINGK.［SANSKRIT-WÖRTERBUCH］ BUCH DRUCKEREI DER KAISERLICHEN AKADEMIE DER WISSENSHAFTEN.

湯田豊著「サンスクリット文法」2007（株）大学書林